

「わかる」ということの多層性について (Ⅳ)

—アジア学院での新しい生活世界の形成を事例として (その2) —

矢 谷 慈 国

On the Multiplicity of Understanding (Ⅳ)

: A Case Study on the Construction of New Life World
in Asian Rural Institute (2)

Yoshikuni YATANI

(Ⅲ) アジア学院の組織と農村リーダー訓練の具体的内容

(1) アジア学院 (ARI) の組織とコミュニティ・アプローチ。

1987年度のトレーニングハンドブック (以下 T. H. B. と略記) の A-4, には「アジア学院組織図」がかかげられている。(第7表)

まず、理事会、監事、評議員会の組織は、「¹³⁾準学校法人アジア学院寄附行為」の定めるところにより、学校法人格の構成上不可欠の組織である理事会9名中、理事長校長の高見と副校長のデブリーズが学内理事、他の7名はそれぞれ、日本基督教団西那須野教会牧師、同教会員、同教団宣教師 (米国人)、同教団総主事、AVACO 総主事、東京 YMCA 総主事、などの肩書を持った、キリスト教関係の学外理事である。

監事2名も学外者で、キリスト教関係1名、会社関係1名である。

評議員会は13名中、3名が ARI の古参職員有沢、長嶋、野崎で、他のメンバーは、上記学外理事と重複する者2名、その他、国際基督教大学教授、同志社大学教授、東京大学教授、西府農業協同組合長、在日大韓基督教教会牧師、大学セミナーハウス事業部長、海外旅行社社長、工業会社社長などの肩書を持つ者10名という構成である。

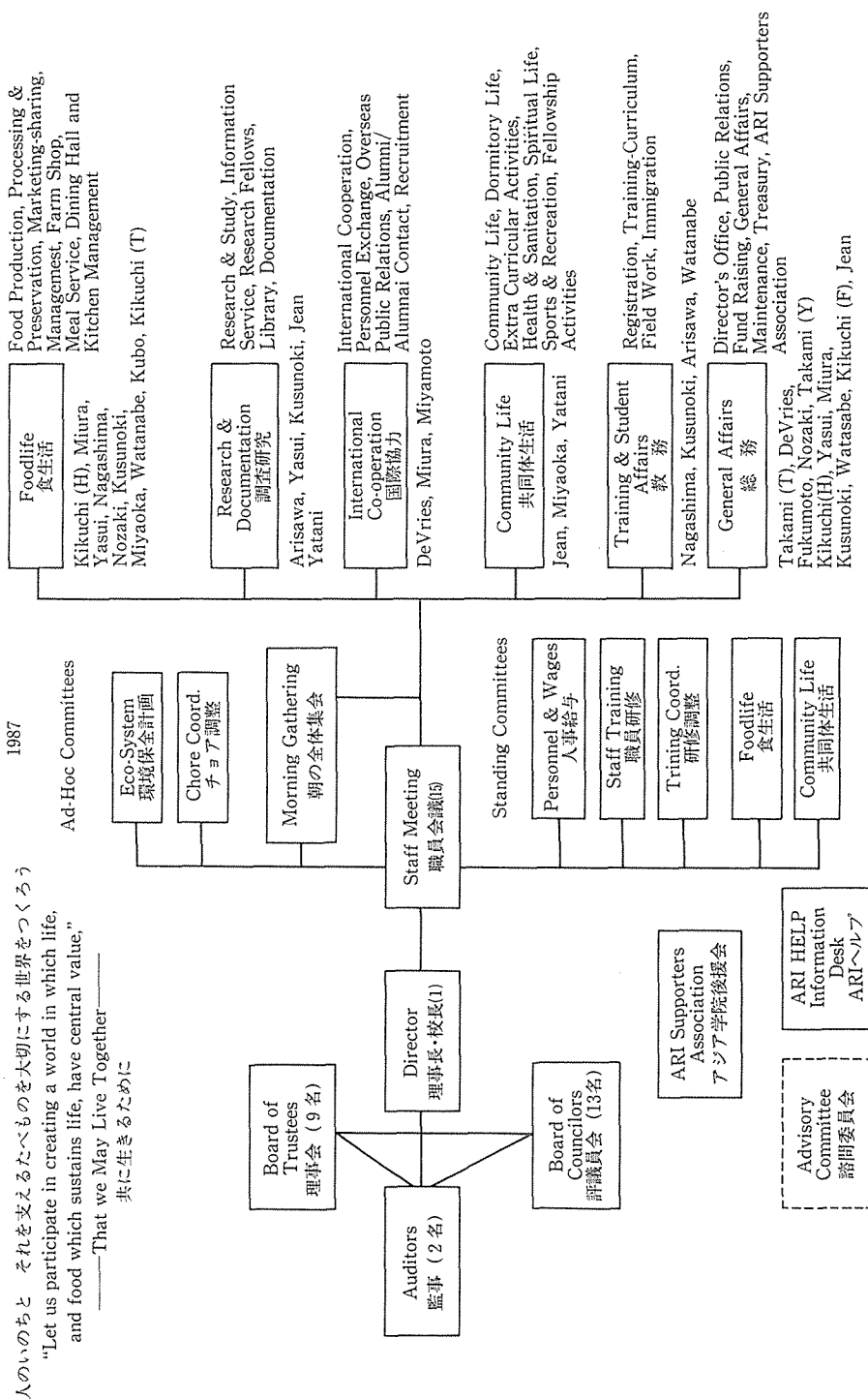
以上のフォーマルな組織のメンバーは、比較的固定的で、欠員ができた時に補充するという形での変化のみであり、継続性が高いといえる。これらの組織の運営は「寄附行為」の定める所に従って行われ、年に2～3回開催されているが、実際の研修プログラムの運営は、校長以下の職員会、各種委員会 (7委員会)、職員ボランティア各種管理部門 (6部門) が行っている。

職員会議は1987年度では専任の職員14名、インターン (筆者) の計15名の構成で、隔週水曜日の午後2時から5時が定例であり、しばしば5時からのチャアの時間に食い込んだり、それ

第7表 アジア学院組織図

ARI トレーニングハンドブック1987年度版より

ARI ORGANIZATIONAL CHART



でも時間が足りない場合は、夕食後の時間に再び集まったり、臨時に別の日に短い職員会を持ったりして、行われた。筆者もインターンとして職員会に参加を認められ、職員サイドからもARIの活動の実態を知るよい機会となった。職員会の司会はメンバーが交代で行う。初めに校長による聖書朗読、祈り、短い感話の後、前半はメンバー全員が順次自分の担当している複数の仕事について一巡して報告する。お茶菓子の短い休けいのあと、後半は提案や協議事項が議論される。

筆者も、管理部門としては調査研究と男子寮のコーディネーター、チャオではエコチャオ、委員会では共同体生活委員会にそれぞれ属していたので、自分の分担していることを、職員会のメンバーとして報告したり、意見を述べたりすることができた。ARIの研修のあらゆる側面を参与観察者として経験したいという筆者の希望は、男子寮のコーディネーター(寮監)として共に住み、多くの時間を研修生と共にし、職員会にも、各種委員会にもメンバーとして参加することが許されたことで、原理的かつ十分に満たされたと言える。このようなオープンな態度を学外者である筆者に対してARIの職員会が取って下さったことは本研究が表面的なものにとどまらない、ARIという現象の深さと拡がりにふみ込んだものとなるための基本的な助けとなった。ここに特記して感謝したい。

ARIが制度として、ボランティアやインターン¹⁴⁾、長期訪問者やワークキャンパーの受け入れを行っていることは、組織論の観点からすると以下のように言えよう。ARI自身が外からの刺激を受けて自己革新を行うと共に、それらの制度を通して、人と人との関わりを中心とするネットワークキングの輪を拡げていくことによって、ARIの理念と実践が、学外の個人や団体にも影響を与えるという「開放的自己革新モデル」とも言うべき組織方法を取っているのである。

しかし、職員会の構成とその権限に関しては、各種委員会や毎週行われる反省と計画の会の権限との関係において、研修生、ボランティア、非常勤の職員の代表も職員会議に参加することを認めるべきではないかという疑問が提出されていた。

このことは、ARIの全メンバーのうち、研修生、ボランティア、インターンは毎年更新される入れ代わるメンバーであるのに対して、職員は長く継続的に居続けるメンバーであるという、メンバーシップの根本的な差異に関わる問題である。職員の継続性がARIの理念と実践の成長展開および、学校法人としての制度的一貫性を支えてきた基本要件である。と同時に、一番長くいる者たちが現在ARIで起っていることに一番責任がある。それはその積極的、理念の実現の側面のみならず、消極面、理念からの逸脱や墮落の現象にも職員が最も責任ある立場にあるのだということである。この問題については、後により詳しく取りあげたい。

職員会では、ARIの活動のあらゆる側面について、それぞれの担当職員から報告がなされ協議が行われる。報告のし方で特徴的なことは、15名の職員会のメンバーが自分の担当する複数

の活動について、一人ずつ順に述べ、それが全メンバーに一巡することで報告を終えることである。一人5分としても最低1時間15分が報告に必要であることになり、職員会がしばしば長びく原因ともなっている。

外部者として初めて4月8日の職員会に参加した筆者は、各職員が担当する実にさまざまな仕事や活動のバラエティーの豊富さに¹⁵⁾驚かされた。これは通常の学校や会社の会議で話されるであろう内容の拡がり、筆者の具体的経験からすると、例えば大学の教授会のそれを大幅にこえており、それは、まさにARIがコミュニティ・アプローチをとって全メンバーが食料生産に関わり、生活のあらゆる側面を研修の機会として生かそうとする研修方法をとっていることの反映であると感じた。

職員会議に直結する職員の組織は以下の六つの管理部門（課）であり、各々の職員が複数の部門に属し、それぞれの分担職務を、ボランティアの助力を得ながら行っている。しかし別に課長という役職は置いていない。

食生活部門は、食糧生産、食品加工と保存、生産物の販売と分配、管理、農業機械、給食、食堂と台所の管理を分担している。

菊地（創）がボランティア菊地（崇）と共に農業機械、修理工場の管理運営とその実習指導を担当。三浦はボランティア村上と共に穀物野菜作り及びその実習の指導を担当。有沢がボランティア桐野と共に稲作とその実習の指導。長嶋がボランティア杉山と共にニワトリ飼育とその実習の指導。野崎、楠がボランティア進藤と共に養豚とウサギ飼育とその実習の指導。久保がボランティア熊谷と共に、乳牛・山羊・羊の飼育とその実習の指導。宮岡と菊地（ふじ）がボランティア水野と共に食堂台所とその実習の指導。安井と渡辺がボランティア有川と共に食品加工とその実習の指導。というふうに職員それぞれの分担を、ボランティアの助力を得ながら行うと共に、チャオ（毎日の定常作業）や農場実習作業（Farm Work, Community Work）の指導も、それぞれこの職員とボランティアの組み合わせで担当している。

調査研究部門は、調査研究、情報サービス、調査フェロー、図書室、ドキュメンテーションを分担している。ジーンが図書室の管理を専ら行い、その他の仕事は、有沢、安井、楠、とインターンの矢谷とボランティアの鈴木が行っている。

国際協力部門は、国際交流、人的交流、海外との渉外事務、卒業生との連絡、研修生募集業務の一切を、デブリーズ、宮本、三浦とボランティアのブレンダが担当している。

共同体生活部門は、共同体生活、寮生活、カリキュラム外の活動、健康、衛生、精神生活、スポーツ、レクリエーション、懇親会を分担し、ジーン、宮岡、インターンの矢谷が担当。三人は同時に共同体生活委員会の委員である。

教務部門は、研修生の住民登録、ビザの手続、訓練カリキュラムの全般、実習や見学を分担し、長嶋を責任者として、楠、有沢、渡辺とボランティア杉山が協力して分担している。

「わかる」ということの多層性について（Ⅳ）

総務部門は、校長室業務、渉外、募金活動、総務、メインテナンス、会計、ARI 後援会事務、を分担している。高見は校長としての対内対外事務を行い、ジーンが、対外国の事務を助ける。野崎と菊地（ふじ）は後援会事務。楠は総務担当として総務事務、渉外、訪問者の受付を担当。安井は総務事務の一部、学生保険、印刷、郵便物の受取分配などを分担。三浦と渡辺はボランティア木村とアジアセミナー及びワークキャンプを担当。高見（泰）は会計業務を担当、菊地（創）はボランティア菊地（崇）と共にキャンパスのメインテナンスを担当すると共にメインテナンスチャオの指導を行っている。

以上の職務分担を見てわかるように、各職員は一人で複数の職務を分担している他、講義、農場実習指導、チャオの指導、研修生3～4人を分担するコンサルタント、各種委員会への参加、等々、普通の学校と比べると実に多くの仕事を分担している。

各種委員会（7委員会）のうちには、研修生やボランティアも参加して行われるものが多いが、職員のみで行われるものもある。

職員のみで行われる委員会は、人事給与委員会だけである。この委員会は職員の代表4名で構成され、職員の採用、配置、及び給与の公正な基準について検討する。

職員とボランティア、インターンのみに関わる委員会としては、職員研修委員会があり、職員4名が委員として計画をたて、毎月1回開かれる。職員研修会や、夏学期の終りの一泊研修会、9月の一泊の研修旅行、冬学期中に行われる評価反省会議、等のテーマや発表者の決定及びそれらの研修会の運営などを行う¹⁶⁾。

その他の5つの委員会はいずれも、春学期の4月16日と秋学期の9月3日に、研修生とボランティアは委員を改選して、職員とインターンは同一の委員で構成された。

環境保全計画委員会は職員3名、ボランティア1名、研修生4名の委員からなり、ARIのエコロジカルシステムの考え方に立って、土や空気や水、動植物などの自然と人間のすべてが有機的な調和を保つようにキャンパスを保全するための検討、提案を行う。

ARIのエコシステムについては THB に次のような説明がある。

『我々のモットー「共に生きるために」を実現するために、我々は来る5年間に「ARI・エコシステム」を創り出すための最大の努力を行う。この枠組の中で以下の計画が実行される。

——我々のコミュニティを支えるために6ヘクタール（15エーカー）の土地のすべてを自然環境と調和するように用いること。

——森林地域、耕作地、家畜舎、校舎、職員住宅、校庭と道路の空間のすべてを社会的環境的なバランスを保つために用いる。

——すべての利用できる自然エネルギーを最高度に利用する：太陽、雨、風、土壌。

——地表の水及び地下の水の保全を行う。下水は汚染を起さないよう処理する。

——食物については可能な最大限の自給を達成する。

——有機農法の実践を継続する。

——ARIに住むすべての人々に十分な仕事を与える。

——この ARI での生活様式を他の人々と分ちあう。(THB, D-1)」

この文章は1985年に作られたものだが、この決定にもとづいて、エコチャアが'86年から新に作られた。'87年度には、高見、矢谷が担当者となつて、2～3名の研修生と共に、キャンパスの美化、雑草刈取り、森林の倒木の処理やまびき、大雨の際の水路の保全、メンテナンスチャアのグループとの協力による布袋づめコンクリートの土止め壁作り、リンゴ園傾斜地での自然農法の試み¹⁷⁾などが、エコチャアで行われた。

環境保全委員会はしかし春学期には一度も開かれず、秋学期に一度だけ開催されて、エコシステムの理念と現状のズレを指摘する提言を作成して活動を終った。

チャア調整委員会

「チャアの実施全般が効果的な学習経験として役立つように監督する。この委員会は、最大7名の成員で構成される（4人の研修生、職員から2名、ボランティア、インターンから1名）。委員会はチャアの週毎の配置を作成することに関しては、その責任を下位の委員会に委任することができる。この下位の委員会は2～3名のチャア調整委員によって構成される。(THB, B-10)」

研修調整委員会の機能は以下のとおりである。

「ARI における研修機会を前進させるよう諸活動を展開することである。活動には、フィルム、ビデオ、スライドのクラスや、種々のテーマについての特別講義のような、研修生によって組織されリードされる特別なクラスも含まれる。委員会はまた、毎週の反省計画会及び学期毎の評価計画の会合を組織運営することに対しても責任を負う。その中心的な観点は訓練プログラムを発展させることである。またこの委員会は、効果的で有意義な見学旅行や研修旅行を計画すると同様、外部団体の計画による特別プログラムにも参与する。(THB, B-9)」

委員会の構成は、職員2名、ボランティア1名、研修生4名であり、計7名で運営された。¹⁶⁾

食生活委員会は以下のような ARI の食生活についての考え方に対応すべく、職員4名、ボランティア1名、研修生4名、計9名で構成されている。

「ARI の食生活。食糧生産。ARI の農場は ARI コミュニティの自立のための食糧生産の上にその統合的な訓練プログラムを提供している。そのアプローチは食べ物の自給自足が人々の国民的な独立の前提であるが故に特に強調される。農場作業は ARI のリーダー訓練プログラムの中で統合的で重要な部分を占めている。我々すべては日々の農場作業に従事し、土と動物と共に働く喜びと尊厳を分ちあう。それによって我々は共同で仕事をする態度と、より多くのより健康によい食べ物を作るための技術を発達させる。

食べ物の分配 食物は人間存在にとって基本的なものである。ARI ではすべてのメンバーが我々の農場で作られた食物の準備と分配に参加する。かくて食生活は ARI の訓練プログラムの中心に位置づけられている。いかに食事が用意され分ち合われるかは、我々の生活の質の指標となる。ARI での食事は人類のそして神の家族の一員としての我々の肉体的必要を充し、祝う行為として理解される。この祝祭は食堂で毎日行われる。共同のテーブルに坐り、食べ物を分ちあうその時に、我々は共に成熟へと向う挑戦と機会に出あうのである (THB, D-1)」

共同体生活委員会は、以下のように規定されている。

「わかる」ということの多層性について (Ⅳ)

「ARI の目的にかなったコミュニティ生活を導き推進することを助ける。委員会は可能な限りコミュニティメンバーのアイデアや必要を考慮する。この委員会は男女の二つの寮の委員、他の研修生、ボランティアとスタッフによって構成される。この委員会の特に関係する領域は、寮生活、課外活動、健康と衛生、精神生活、スポーツとレクリエーション、懇親会などである。研修生が到着してから出発するまでここでの生活のすべての側面は、我々のコミュニティ形成に重要なのである。(THB, C-1)」

この委員会は、職員側からは、男子寮と女子寮のコーディネーター、2名、その他の関係職員3名、研修生側からは男子寮と女子寮の寮委員会の代表2名、その他の研修生代表4名、ボランティアから1名の計12名の大世帯であった。

ARI ヘルプとは'86年度から作られた組織である。

「その目的は、売春問題で助けを必要とするアジアの女性たちに、この問題を解決する実際的なプロセスに関する情報を提供することである。この ARI ヘルプ・インフォメーションデスクは、1) 1986年4月に東京に開設されたアジア女性の隠れ家のネットワークの一部として奉仕する。この組織は House in Emergency of Love and Peace (HELP) として知られているもので、日本の女性のみならず、他の国々からの女性が日本滞在中に、女性として搾取されているような場合に援助をする。ヘルプは最大2週間の宿泊をそれらの危機状態にある女性に提供すると共に、カウンセリングと法的な援助を行う。2) このような問題について我々の地域においても意識を高めていくことに努める。

これらの女性の問題に対する関心は ARI の人間開発の哲学とプログラムに深く関わっている。(THB, A-9)」

この組織は、ARI の立地する近辺地域の宇都宮市や塩原温泉などで実際、アジアの女性が働いていて、それが地元の警察に保護され、ARI の職員が通訳に依頼されて、そのような女性たちの話を聞くという経験から始められた。主に、女性職員と女子研修生が熱心に取り組んでおり、職員研修会での、それぞれの国での女性問題に対する研修生への調査の報告、10月の収穫感謝祭での展示を行った。

アジア学院後援会は、アジア学院の理念に共感し、その研修プログラムのために寄附を集め財政的に ARI を後援するために組織されたもので、1976年から発足し、地元の大田原市、西那須野町、宇都宮市に次々と支部が発足し、1986年9月には東京支部も発足した。現在総会員数1600名、'87年度の募金目標1200万円のうち、4月から1月期までに約840万円を達成している。支部の集会に ARI の職員や研修生を呼んだり、ARI の行事に参加したり、支部主催で研修生を招待してバーベキュー大会を行ったりという形で、交流と支援を行ってきている。後援会の事務は職員の野崎と菊地（ふじ）が当っており、会誌「アジアの泉」を年4回発行している。

ARI の組織図とその概要の説明を行ったが、このような組織形態を取っているのは、人事給与委員会をのぞいて、他の六つの委員会には大幅に研修生・ボランティア・インターンの委員を参加させ、できるだけ「全コミュニティメンバー参加型の組織」をめざしているからである。それは ARI の研修が「食べ物を共に作り分かちあい、共に生活し、メンバーのすべてが平等で公正なコミュニティ（新しい生活世界）を作りあげるべく参加する中で、リーダーとし

ての実行力と識見と人間的成熟を育てていこうとする、コミュニティ・アプローチと名づけるものをめざしていることと対応している。

旧くからいる職員たちに聞くと、鶴川時代10年、西那須野に移ってから15年計25年間の歴史の中で多くの変化があった。そのことは前稿で有沢論文から引用した「第3表1961—1984カリキュラム変遷」からもうかがわれる。有機農法の強調も現在タイに出向している職員浅井が、10年近くコツコツ積み重ねてきた土壌改良の努力を、現在の三浦が引つぎ、野菜類に関しては100%有機農法を実現し、他の米作や麦作、牧草類もそれに近づける努力を進めるようになったものである。エコシステムという考え方も、有機農法の実践が定着していく中で最近になってはっきりと打ち出されるに至ったものである。鶴川時代の初期は、教室での授業（坐学）が主体であったカリキュラムの中に、1965年以降、農場実習とチャオが加えられ、見学や、個人プロジェクト、夏期の校外実習（ホームステイ）等の実践的経験学習カリキュラムも充実の度を加えた。1976年以降、チャオの時間を毎日3時間として、「毎日コミュニティメンバーの全員が食べ物の生産と分配とコミュニティ維持のための労働を分担して行い、そのようなプロセス自体を学習の最も重要な機会の一つとして位置づける」ことになった。

以上のような内部での研修内容の変化と並行して、対外的には、ARI 後援会の組織化（'76年から）ボランティアの受け入れ（'76年から）、インターンの受け入れ（'82年から）、学校、教会団体等のワークキャンプの受け入れ、ARI 主催による、一般の市民学生を対象としたアジアセミナーワークキャンプの開始（'82年から8回）ARI 卒業生を訪問するスタディツアーの実施（'82年から8回）などの活動を次々に進め、外部の社会とのヒューマンベースに立った交流を充実してきている。また10数カ国から来ている ARI 研修生30数名が、スクールバス一台に乗り込んで出かけて行く、見学や研修旅行は、いわばミニ国際社会が移動しているようなもので、見学先の個人や諸団体にとっては、得がたい国際交流や異文化理解の機会となり、この形での交流も次第にその範囲を拡げている。夏期個人プロジェクトの実習のために研修生がホームステイの形で数日、あるいは最大四週間滞在する、実習受け入れ先の農家や団体にとっても同様のことが言える。

そのような ARI の農村リーダー訓練プログラムの20数年の展開の結果として現在の ARI の諸活動があり、筆者はそれを「新しい生活世界の形成をめざすコミュニティ・アプローチ」と名づけたと思う。そこには現代の近代化した資本主義社会のもつ諸原理を根本的に批判し、それを乗り越えて、平等で公正な参加によって、すべての人々がその差異（文化、宗教、言語などの）にもかかわらず「共に生きるために」新しい生活世界を形成していく諸原理の実践的な追求の試みが見出されるのである。

ARI の「新しい生活世界の形成をめざすコミュニティ・アプローチ」が持つ諸原理と、近代的資本主義社会のもつ支配的諸原理とをあえて単純化し、図式化して対比すると以下のよう

になるだろう。

近代資本主義社会の諸原理

——ARI のコミュニティ・アプローチのめざす諸原理

- 価値として、自由競争による利潤の最大化の努力がすべての人に最大の幸福と福祉を生み出す。——価値として、「共に生きるために」人のいのちと、それを支える食べ物を大切にする世界を作ろう。
- 宗教性の喪失、世俗化した価値観。——宗教的価値、精神性を重視する。
- 商品生産、第二次産業、第三次産業の重視と農業人口の減少。「商品」としての農業生産物の位置づけ。——「商品」としてではなく、「人のいのち」を支える「食べ物」の生産の重視。資本主義的商品としての食糧ではない。
- 合理化、商品化、規模拡大による効率化を追求する農業。——自立と自給自足をめざす適性規模の農業(食糧生産)。
- 科学農業、自然を支配し利用する農業、化学肥料、農業、大型機械化の農業。外部のエネルギーや資源を多投して経済効率を上げる方法。——有機農業、エコロジーとの調和をめざし、外からの資本の支配を受けない、地域の資源を生かした、適性技術の展開をめざす。
- 近代化した専門機能的分業にもとづく組織や社会の運営。この分業は必然的に、支配被支配関係を生む。——専門分業を固定化させず、必要な仕事の全体を分ちあう、交代しあう。分業による支配関係の固定をさける。
- 近代資本主義社会が固定するに至った、支払われる労働と支払われない家事労働の分化による男女差別。——農村開発のリーダーとしての女性の役割の重視とARI ヘルプへの取り組み。
- 学校としては、教える者と教えられるものの分化が厳重で、それは支配関係を固定化させている。——教える者と教えられる者の分化を固定化させず、流動化する。異文化の人々が共に学びあう。
- 私立学校の場合は、規模拡大への志向を必然的に内在している。定員増、学科増。——学校として、規模拡大をめざさない。コミュニティ・アプローチを実現しうる適性規模を保つ。
- 学校法人としては、制度化した閉じた、固い組織になりやすい。——制度を次々に改変していく開いた組織、やわらかいネットワークングを大切にする組織。
- 試験による優劣をつけ、結果としては、一人一人の能力の向上と成長よりも、学生の選別と序列化の機能を果す教育。——試験をしない、点数をつけない、特定の分野で能力の低いものには、あわせて待つ。一人一人の全体としてのリーダーシップ能力の向上をめざす。
- 主として文字や記号を媒介にして、特定の確立された知識を頭脳レベルで学習する方法。——教室での文字や記号を媒介とした知識と農場や生活現場での実践、体験とを総合する学習方法。
- 学校法人として、国や自治体や私的経営主体によって作られた法的、制度的、経済的制約を強く受けている学校。——知事認可の準学校法人であるが、実質上すべての運営費を寄附でまかない、制度的、経済的自立性を保とうとしている学校。
- 国際交流や国際理解の必要は強調されているが、特定分野の専門家の短期の会議や訪問を通じた交流、旅行などによる一面的交流が主。——一年間共に汗を流し、生活する中で、異宗教、異文化、異言語の人々が新しい生活世界を形成しようと参加する、コミュニティ・アプローチの中での交流、相互理解。

以上の対比は、あくまでも理念型的なものであり、ARI の現実がすべて上記のことを実現し得ているというわけではない。それらは、ARI の活動の中に一年間参加し、実際に ARI の「コミュニティ生活」¹⁷⁾を共に生きる中で、ARI が目指し、達成しようとしている方向を筆者なりに要約すると上記のような諸点があげられるという主旨のものである。そしてそれを一括して名づける場合に、「新しい生活世界の形成をめざすコミュニティ・アプローチ」ということばにまとめあげてみたわけである。

それは、近代以前の村落共同体へ回帰するとか、既存の社会主義社会のどれかをモデルとするとかでは勿論ない。それは、近代社会が生み出してしまった諸問題と近代化をそれぞれのモデルで急ぐ発展途上国の社会の中に生じつつある諸問題の両方、いわば21世紀の地球上で70億を超える人間が共に生きるために解決しなければならない問題状況に取り組むための有効な

アプローチの一つ、あるいは一つの可能なモデルとして高く評価できるものである。

ARI の理念と実践のそのような特徴が、現代の日本の社会の各層、各領域（地方自治体、学校、宗教団体、女性問題のグループ、開発問題に関わる市民団体（NGO）、農業の革新をめざす団体、ロータリークラブ、健康食品のグループ、有機農法の農家や消費者団体など）からますます注目されるようになりつつある理由である。近代主義の中にある現状に行きづまりを感じつつある諸領域や分野の人々にとって ARI の上記のような「新しい生活世界の形成をめざすコミュニティ・アプローチ」の理念と実践は、何か新しい方向、引きつけられる魅力を持って受けとめられるものであり、ARI を訪問したり、ARI の研修生との交流会を計画する個人や団体が年々増加している原因もそこにあると思われる。この点を明らかにするためには、ARI が関係する外部の諸個人や団体、訪問者とそれらが ARI と関わる関心領域の系統的研究が必要となる。

(2) 1987年度 ARI 農村リーダーシップトレーニングの具体的内容

1) 年間スケジュール

1987年度の ARI の学年暦及び実施した年間プログラムは以下のようなものであった。

春学期（4月1日～7月26日）

- 3月末より 新年度の研修生順次到着
- 4月6日～13日 研修生へのオリエンテーション、THB に即して、各担当職員から行う。
- 4月9日 ボランティア、インターンへのオリエンテーション
- 4月11日 町内烏ヶ森公園への桜見物（コミュニティ行事）
- 4月14日 第15回入学式（入学式までに到着した研修生21名）
- 4月16日 各種委員会の選出
- 4月18日 馬頭町学校林造成準備作業
- 4月20日 教室での授業開始
- 4月23日～6月25日 研修生の自己紹介セミナー（毎週金曜日各4名）
- 5月18日 田植え（コミュニティワーク）
- 5月20日 学校ピクニック（大沼公園・コミュニティ行事）
- 5月30日 馬頭町学校林の植樹祭と植林作業
- 7月1日～2日 特別プログラム、福岡正信氏自然農法講演会
- 7月6日～19日 北日本研修旅行、2グループに分れ各1週間
- 7月20日～9月6日 学外諸団体によるワークキャンプ 11団体

夏学期（7月27日～8月30日）

- 7月27日～8月30日 研修生は夏期個人プロジェクト 5週間のうち、1週間は ARI に交代でとどまり、他の4週間は学外の実習先に出かける。

- 8月10日～16日 ARI 主催第8回アジアセミナーワークキャンプ

秋学期（8月31日～12月13日）

- 8月31日～9月1日 職員、ボランティア、インターンによる1泊中間評価会
- 9月3日 各種委員会の改選、収穫感謝祭実行委員の選出

「わかる」ということの多層性について (IV)

9月8日～26日 研修生、春と夏学期の個人プロジェクトの報告セッション

9月16日 アジア学院創立記念日休業

9月24日 稲刈り (コミュニティワーク)

10月3日～9日 収穫感謝祭準備週間, HTC ボランティア のべ 50名

10月10日～11日 第15回収穫感謝祭 外来者約3000人,

11月13日～26日 西日本研修旅行

11月30日～12月5日 研修生、未来計画発表のセッション

12月12日 第15回卒業式 卒業生34名

冬学期 (12月14日～2月29日)

年末までに、研修生は順次帰国

冬学期も滞在を延長して個人プロジェクトを学内と学外で行う研修生13名

12月25日 クリスマス

12月29～1月3日 年末年始休暇

1月19日～21日 } 職員、ボランティア、インターンによる年間評価反省会議
1月26日～28日 }

2月22日～23日 研修生冬学期個人プロジェクト 報告セッション

2月25日 日帰りスキーツアー (コミュニティ行事)

2月29日 冬学期終了 残留研修生は順次帰国

3月9日 残留ボランティアの反省発表会

3月中は、新学期の準備、新しい THB の準備、そうじ、寮の準備、等新年度に向けて、野菜の苗床作り、稲の苗づくり、学校林作業、古着整理、新しい研修生ボランティアの到着など多忙。

ARI の年間スケジュールは上記のようであるが、人間の動きの面から ARI の1年間を概観すると次のようになる。

新学年が開始される直前3月中旬が一番 ARI で生活する人間の数が少ない時期であり、職員10数名と2年目の研修生2～3名と残留ボランティアのみとなる。3月下旬ころから次々に新年度の研修生、ボランティア、インターンが到着し ARI のキャンパスはにぎやかさと活気をとりもどしていく。'78年度についていえば3月16日から3月末までに到着した研修生14名、4月1日から入学式の14日までに到着した研修生5名、それ以後5月末日までに10名、1番遅く到着したタンザニアの研修生は6月29日という具合である。日本人ボランティア、インターンは4月中に約10名が到着した。

'87年度の研修生は、正規のコースの者31名、2年目の研修生4名、短期(3カ月)の研修生2名、計37名が総数であり、3カ月以上1年間を単位として受け容れているボランティア、インターンは最大時で18名(日本12名、アメリカ3名、カナダ1名、バングラディシュ1名、タイ¹⁸⁾1名)という構成であった。これに職員(専任日本人13名、アメリカ人2名、非常勤日本人5名、うち専任職員1名は長期海外外出中)を加えると、8月～11月の最大期で68名の ARI コミュニティメンバーが共に生活をしていたことになる。

7月末の1週間と8月中の4週間、計5週間は夏学期として研修生の個人プロジェクトを中心とする特別のプログラムが組まれる。その年の正規研修生31名を5つのグループに分け、第

1 週から第 5 週まで、各グループ 1 週間交代で ARI にとどまり、職員、ボランティアと共に農作業や ARI の運営に責任をもつ。他の 4 週間は学外の実習先でそれぞれの個人プロジェクトの実習を行う。したがってこの期間の研修生の数は、その週の当番に当たっている数名と、一つの実習先から別の実習先へ移るために帰校している者、あるいは ARI から通える近所の実習先に行っている、などの理由で在校している研修生数名、計 10 名から 10 数名しか学内にはいないことになる。

その間、各種の教会や学校団体のワークキャンプグループが 3 泊 4 日を単位として ARI でキャンプを行う。ワークキャンパーは 1 団体数名から 20 名くらいまでで、ARI 内のワークキャンパー宿舎、台所で宿泊自炊しつつ、ARI の農作業やチャオに参加し、夜には研修生との交流会や勉強会をもったりする。ARI 主催のアジアセミナーワークキャンプは 1 週間の日程で、テーマを決め、時には外から講師を招いて、担当職員も加わって学習と労働のプログラムを行う。

10 月の第二の土曜、日曜が ARI の収穫感謝祭であり、研修生は、一週間前からあらゆる準備にかかるが、その間、1 日以上手伝ってくれる収穫感謝祭準備のためのボランティアを募集し（延べ 50 名ぐらい）年間で最も人数が多いにぎやかな時期となる。収穫感謝祭の二日間は、近隣の人々や東京やさらに遠方からの訪問客が延べ 3000 人程も集まり、一大祭典行事となる。

その後 11 月には 2 週間の研修生全員が参加する西日本旅行があり、残留職員とボランティアだけが ARI の運営をする時期がある。12 月 12 日の卒業式のあとは、大半の研修生が帰国便の飛行機の日程に合わせて徐々に帰国し、ボランティアの多くも ARI での奉仕を終えて、年末にかけて ARI のメンバーの数は減少していく。

12 月末から 2 月末までの冬学期は、残留している研修生 13 名も個人プロジェクトの実習のために学外へ出ていることが多く、実際に学内に残留しているのは、職員、少数のボランティア、インターン、実習先に出かけていない研修生等の 20 名前後となる。3 月中旬には、冬学期を終えた研修生も帰国し、最後まで残っていたボランティア、インターンも ARI を辞し、最も人数の少い時期となり、次の年のサイクルに移っていく。

以上のコミュニティメンバーの動きに加えて、ARI には内外からの実にさまざまな訪問者が、日帰りの形や寮の空室での 1 泊から数泊の形でやってくる。訪問者は ARI の行っていることに関心のある、教会、宗教団体、学校関係者、ARI と交流プログラムを実施している地方自治体の関係者、研修生の実習受け容れをしている有機農法の農家やその団体、第三世界の開発問題と取り組んでいる民間市民団体（NGO）の関係者、発展途上国からの NGO 関係者の研修旅行団、ARI 後援会の役員や会員、研修生 10 名に奨学金を出している地元ロータリークラブ、ARI を支援している海外の団体や教会関係者、会議などで来日している ARI の卒業生や研修生の送り出し団体の関係者、元ボランティアやインターン、日本旅行の途中で情報を得て

第8表 ARI 年間食品自給率，食糧生産加工，食糧生産プログラム

国際理解プログラム
今年度も各地で農業青年，その他の人達との国際理解プログラムに参加しましたが，これらのプログラムを通してそれぞれの地域での農村開発について共に学ぶことになりました。
研修生全体としての主なプログラムは次の通りでした。
黒羽町川西中学校，宇都宮北高校，聖隷学園高校，馬頭町国際交流会，栃木県国際理解のための高校生キャンプ，宇都宮 YMCA，栃木県農業青年シンポジウム，山形県村山市，白鳥八日会，村山市戸沢中学校，最野真中野市，アジア・アフリカを知る会，帯広市・アジア同時刻帯交流，京都市・関西セミナーハウス
生産加工実習
毎朝・晩の定例作業及び週三回の農作業を通して全研修生と職員・ボランティアによって進められ，私達の命を支える大切な食べ物を生産，加工，保存しました。
生産量等については次ページの表を参照ください。
また，アジア学院食堂での食糧自給状況は次の通りです。

主な食品の自給率				1987年4月～11月		31650食	
種	類	消費量 (t/g)	自家生産 量 (kg)	自給率 %	1人1日 当りの供 給量 (g)	1人1日 当りの供 給量 (kcal)	1人1日 当りの供 給量 (t/g)
米	米	2352	2352	100	222	790	790
パン	パン	633	633	100	60	156	156
いも	いも	834	724	87	79	60	60
(葉菜類)	野菜類	930	930	100	88	30	30
玉ねぎ	玉ねぎ	257	113	44	24	90	90
その他の野菜	その他の野菜	3644	3604	98	342		
精加工肉類	精加工肉類	1603	1603	100	60	130	130
魚卵	魚卵	15	15	100	1		
牛乳	牛乳	300	0	0	24	50	50
調味料	調味料	569	569	100	60	97	97
砂糖	砂糖	4167	4167	100	395	273	273
小麦粉・その他	小麦粉・その他	349	0	0		10	10
		171	0	0	16	6	6
		243	0	0	23	188	188
		255	135	52	23	83	83
		248	60	24	24	50	50
合計	合計	16570	14905	90			2013

1人1日約 2010 kcal の食物を供給したことになります。
この供給量のうち81%が ARI の農場生産物でまかなわれました。
(カロリーによる自給率)

「わかる」ということのも多属性について (Ⅳ)

食糧生産加工

種	類	数	量	生産高	備	考
作物：水稲	うるち米	105.4 a	3921kg			この他約70種類の野菜を栽培している。
小	もち米	10.2	345			
ジャガイモ	麦	20.0	700			
人参	ネギ	10.0	2000			
玉ねぎ	参	13.0	2000			
さといも	玉	10.0	400			
大根	さといも	6.0	1000			
	根	4.0	500			
	マ	3.0	600			
	ト	1.3	500			
肥料	肥	100 t	9			
養鶏鶏肥	養鶏鶏肥	30.0 a	6000kg			
飼料作物：牧草	草	3000	3000			
乾草	草	3000	3000			
稲ワラ	ワラ	25000	25000			
デントコーンサイレージ	サイレージ	10000	10000			
牧草サイレージ	サイレージ	25.0	14000			
ソルゴー	ソルゴー	25.0	14000			
家畜：牛・搾乳牛	牛	4頭	9000kg			牛乳
育成牛	育成牛	2頭	11頭			
山羊	山羊	13頭	8頭			
雄豚	雄豚	1頭	70頭			
母豚	母豚	450羽	350羽			
子豚生産(肥育)	子豚生産(肥育)	200羽	40羽			
鶏：産卵鶏	産卵鶏	150羽	150羽			
ブロイラー	ブロイラー	150羽	150羽			
あひる	あひる	150羽	150羽			
がちょう	がちょう	150羽	150羽			
ほろホロ鳥	ほろホロ鳥	150羽	150羽			
うさぎ	うさぎ	150羽	150羽			
加工：ジャム類	ジャム類	1650kg	1650kg			
加工肉	加工肉	240	240			
大豆・加工品	大豆・加工品	260	260			
パン	パン	4560斤	4560斤			
クッキー	クッキー	4560斤	4560斤			
ピクルス	ピクルス	4560斤	4560斤			

これらの作物等は農薬・化学肥料を使用せず堆肥・厩肥による有機農法で栽培されています。

(ARI, 1987年度研修報告書より)

立ち寄った外国の青年，ARI を取材に来るテレビや雑誌の関係者などである。

訪問者の受付は総務の渉外係の職員を窓口として職員会議で報告承認され，朝の全体集会で予告される。朝の全体集会や食堂での食事に参加する訪問者はその場でコミュニティメンバーに紹介されたり，自己紹介を求められる。ARI のユニークな活動が内外の個人や団体に知られ，新聞，雑誌，テレビなどで報道されるにつれて，年々訪問者の種類と数が増加してきており，種々の形での協力関係が広がっていく傾向が顕著になってきている。

ARI は第三世界の草の根レベルの農民の自立を助ける農村リーダーの養成を目的として，学内に約6ヘクタールの校地（校舎，食堂，寮，倉庫，食品加工所，工作所，養鶏，養豚場，牛舎，畑，森林）を所有し，学外に約2ヘクタールの田，畑を借用して，食糧の自給をめざし，コミュニティの全メンバーが参加する形で食糧生産を行っている。それは西那須野の土と自然との関わりの中でくりひろげられる生活的な営みである。ARI の1年間の自然との関わりの中で行われる食糧生産と消費の概要は第8表に示したとおりである。

2) 毎日のプログラムと週間プログラム

'87年度のARIのトレーニングプログラムは4月から12月の卒業式までで38週間あったが，そのうち夏学期と北日本及び西日本研修旅行などの行事をのぞく他は，基本的に以下の週間プログラムに従って毎日の研修が行われた。

第9表のように，毎日のスケジュールで同じことがくりかえされるのは，6時30分ラジオ体操と朝の祈りの後8時15分まで朝のチャア。8時半から9時半までの朝食と自由時間。9時半から10時までの朝の全体集会。10時から30分間休けい。10時半から12時25分まで朝の課業（内容は曜日によって異なる）。12時半から1時50分まで昼食と自由時間。1時50分から4時45分まで午後の課業（内容は曜日によって異なる）。5時から6時まで夕方のチャア。6時から6時半まで自由時間，6時半から7時半まで夕食，7時半から10時まで自習，自由時間，委員会や英語補習や指圧教室など。10時以降静かにする時間。10時を期して毎夜交代で二人組でキャンパス内の夜警，火の用心のパトロールが行われる。

週日の毎日のスケジュールは，午前2時間と午後2時間の課業の時間の内容が曜日によって表のように変化がある他は，毎日同じことがくりかえされ1日のリズムを作っている。

チャア，朝の全体集会，午前と午後の課業の内容，については次節で説明することにして，ここでは三度の食事，自由時間，夕食後の時間及び週末について述べておく。

食 事

食べ物の生産と加工と分配はARIの訓練プログラムの中心をなす最も重要なことからであり，毎日の食堂（コイノニアハウス）での食を共にする行事は特に重視されている。食堂がコイノニアハウスとよばれるのは聖書に由来するギリシア語のコイノニアが「交わり」を意味しているからであり，「共に生きる」ことの原点が「共に食べる」ことにあるからである。

「わかる」ということの多層性について (IV)

第9表 1987年度 ARI 週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
AM 6:30～ 8:15	6:30から朝のラジオ体操, 祈りの後 朝 の チ ョ ア						6:30～7:30
8:40～ 9:30	朝 食 と 自 由 時 間						8:00～8:30
9:30～10:00	朝の全体集会（前半15分礼拝, 後半15分報告, 告知）						日曜礼拝 大田原カソリック教会, 9:00 （日基）西那須野教会 10:30 那須野原福音教会 10:30
10:00～10:30	自 由 時 間						
10:30～11:25	a) 第三世界指導者論 b) 時事問題	個人プロジェクト／農場作業	I 有機農法 II 畜 産	研修生セミナー／特別講義	農場作業	見学旅行	
12:30～ 1:30	昼 食（コミュニティランチ）						
PM 1:50～ 2:45	チャオオリエンテーション		III 熱帯園芸	e) 協同組合	f) 日本語		
2:50～ 3:45	c) 農村生活の精神性	農場作業	f) 日本語／フィルム・ビデオ・スライドセッション	IV 農業機械 V1 栄養学 V2 食品加工 V3 農場経営	反省計画会議		
3:50～ 4:45	f) 日 本 語						
5:00～ 6:00	タ 方 の チ ョ ア						
6:30～ 7:30	タ 食						
7:30～10:00	自習, 各種委員会, 英語補習, 指圧クラスなど						
10:00	夜のパトロール						

(THB, B-1 を中心に追記して作製)

食卓は中華料理風の数人がけの円卓で大皿に盛ったターンテーブル上の料理をそれぞれ自分の皿に盛って食べつつ, 話に花を咲かせる交わりの時を持つよう工夫されている。料理は台所で担当職員（専任1名, パート2～3名）とボランティア（1名）, 研修生（3～4名）が用意する。朝と夕はチャオの形で研修生も参加して作るが, 昼は課業の都合で研修生は参加しない。料理の材料は第8表で記したようにほとんど ARI で生産したものである。料理の種類は多くの国や文化から来ている研修生の好みを反映して実に多彩であるが, 香辛料の使い方などは地元通りでは他の人々が食べられないので, 各国料理の ARI 風アレンジとなる。これらの多彩なレパートリーは, その処方を冊子にまとめて自家出版の¹⁹⁾本になっている。

宗教による食事のタブーは尊重されていて, カレー料理などの場合も, 牛肉が禁じられているヒンズー教徒, 豚肉が禁じられているイスラム教徒, 肉類一切が禁じられているベジタリアンのヒンズー教徒等の人々がちゃんと食べられるように, 例えば牛, 豚肉のカレーと, 鳥肉の

カレーと、野菜だけのカレーを人数に応じて用意するというふうの問題を解決している。

有機農法で作った野菜類、自家製の牛乳やヨーグルト、ジャム、トーフ、ハム、ソーセージ、パンなど、自然食品愛好家から見ればまことにぜいたくな食事と言える。訪問者の中には ARI に対してこの食事の健康さの視点から共感と関心をよせる人々も多い。

食卓は別に席が決まっていなくて、自由にどこへ坐ってもよい（最大時は10卓以上）が、自ずと席が固定し同じ顔ぶれで食事をする傾向と、できるだけ、いろんなテーブルでいろんな人と共に食事をしたいという傾向とが交錯しあって席が決まってゆく。例えばいつも同じ席で食べたい人も、後から来てめざす席に先に来た人が坐っている場合は、別の席に坐ることになるし、ざっと全体を見渡して今日はここにしようと、わざと昨日とちがう席に着くものもある。しかし割合同じメンバーが固定して集まるテーブルもでき、スリランカンテーブルとか、タイテーブルとか言われるものができたりもした。食事時間に打合せの必要がある場合は〇〇委員会はこのテーブルでと委員を集める場合もあった。

「共に食べる」という行為は「共に汗を流して働く」という行為と共に、人と人を結びつけ、相互理解を作りあげる上で最も原初的で強力な方法であり、「共に生きる」という ARI のモットーと、コミュニティ・アプローチの基本をなしているのである。

自由時間 休み時間の過ごし方はいろいろである。スポーツとしては、本館横の広場にバレーボールのネットが張ってあるので、バレーボールやバドミントンなどが男女の若い研修生やボランティアの間でよく行われた。

また藤（トウ）で編んで作ったタイのボールを輪になって蹴りあうゲームにタイの研修生だけでなく日本人のボランティアやアフリカの研修生などが加わって楽しむケースもよく見られた。

室内（コイノニアハウス）では、卓球台でのシングルス、ダブルスのゲーム、ピアノを弾いて歌うこと、ギターを弾くこと、歌うこと、テレビを一緒に見ること、おしゃべりをするなどがよく行われた。

食堂には英文の新聞、週刊紙、NGO 関係の雑誌、などを置いたコーナーがあり、食後の一時をそこで過す研修生やボランティアも多い。自国の関連記事に関心を示すのは自然の情である。’87年にはスリランカで、シンハリ族とタミール族の間に武力紛争が続き、スリランカから来ていた二人のタミール出身者と二人のシンハリ出身の研修生たちは熱心にそれらの記事を読んだり話し合ったりしていた。ARI の中では彼らの間に反目は見られなかった。またアキノ政権成立後のフィリピン状況について、フィリピンの研修生と、フィリピンに行くつもりをしている日本人ボランティアの間で議論が行われるという姿も見られた。

夕食後の時間は、原則として自由で、寮でテレビを見たり、自室で手紙を書いたり、発表の準備をしたり、何人か集まってしゃべったり、一緒に酒を飲んだり、センタクをしたり、シャ

ワーを浴びたり、くつろいで過せる時間である。しかし、週一回くらいは自分の属する委員会が開かれることもあるし、英語の補習クラスに出席する者もある。図書室で発表の準備をする者、水曜日の夜には希望者10名前後が指圧教室で学外の講師や職員も加わって指圧を習うこともある。といった具合で全く自由時間というわけでもなかった。

筆者などは夜型人間なのでこの時間に昼間はできない読書や書き物をして、12時を過ぎて寮の便所へ行くと、まだラウンジで深夜テレビを見ている研修生がいるので話をしたり、日本語のテレビの内容を英語で説明することを求められたり、同じく深夜型の研修生とつきあうことも多かった。熱心なイスラム教徒のシラレオネの研修生が、夜の祈りをすませて部屋から出て来たのに出会って話をするということもしばしばだった。

週間スケジュールの中であげられている課業（講義、農場作業、チャオ、研修生セミナー）などについては次節で、トレーニングハンドブックの規定に則して説明するので、ここでは、月曜の午後行われるチャオオリエンテーションと金曜の午後行われる反省と計画の時間について述べておく。

チャオオリエンテーションは毎週月曜の午後1時50分から2時45分まで行われる。研修生は毎週半数ずつずらして2週間毎にチャオを交代するので、二週間同じチャオを続けた研修生と、次の週、新にチャオに加わる研修生が、チャオの内容の引つぎを行う時間であり、これには担当の職員も参加する。担当者が新メンバーに、チャオの概要や意味、作業で学ぶポイントを説明し、旧メンバーが自分の経験したことや気づいたこと、反省すべきことを伝える。この内容はチャオ記録ノートにまとめられ、金曜日に行われる週毎の反省計画会で発表される。

反省計画会は原則として毎週金曜日の午後約2時間をとって行われる。その週の研修や生活全般についての反省と次の週の計画が全員参加で行われる。4月の最初の何回かは、校長や職員が司会をして行われたが、研修調整委員会の活動が軌道に乗ると、研修生が交代で司会と記録の役割を果たすようになった。

報告される事項は、一週間のチャオの報告、先週末に行った見学旅行の報告、その他特別の行事などであり、報告者がそれぞれ決まっている。そのあと報告をふまえて自由に意見を述べたり、討論する時間があり、例えば、個人プロジェクトの時間が短いので、フィルム、ビデオ、スライドの時間を夜にまわして、まとまった時間にすべきだ、というような提案がまとまることもある。職員の側も発言するし、ボランティアも、チャオをやっていて気づくこと、例えば、作業のあと道具をちゃんとしまっておくべきこと、時間を守るべきことなどの発言をする。

研修生のモラルが高い時にはこの時間は活発な討論や提案が行われ充実したものとなるが、モラルが低下すると型どりの報告と月並な意見しか出ないことになり、もっとこの時間を活々としたものにする努力が必要だということが一年のうち何度か指摘された。

先の例のように、この会合で提案されたことが、研修調整委員会や最終的に職員会の議を経

て実現されるまで時間がかかり過ぎて、提案者の何人かはその後発言の意欲を低下させたというような話も聞いた。反省計画会は決定機関ではないのだが、各種委員会や、職員会の決定権のあり方をめぐって、結局、職員会で最終的に決定されるのだから、そこへ研修生やボランティアの代表を参加させるべきだという議論もなされた。このことは、全員が平等に参加してコミュニティを創りあげていくというコミュニティ・アプローチと、現行の学校法人の枠の中で職員会の優勢な位置との関係が問題となることを示している。

週末に関しては、土曜日の夕方と日曜日の朝と夕の三回のチャオが、週末チャオとして、チャオのメンバーが交代で休みを取ることができるように調整される。そのチャオに必要な最少の仕事（例えば牛のチャオだと給餌と搾乳のみ）に限定して人数を少くし、三回のうち一回は休めるように調整を行うわけである。

日曜日の過ごし方は自由であるが、週間スケジュール表にはそれぞれの教派の教会の礼拝時間が明示されているように、出席希望者は職員、ボランティアの運転するマイクロバスや車で、キャンパスからの移動の便が計られている。教会への出席状況については前稿で述べた。

日曜日も、朝食と夕食は食堂で提供されるが昼食については研修生の自前にまかされている。外食する者、食堂の台所で何人か寄って自炊する者、寮の部屋でカップラーメンですます者などさまざまである。

このように、一週間のスケジュールはかなりいそがしく、中味がつまっている。多くの研修生はスケジュールのいそがしさや、チャオや農場作業などを評して「国ではこんなに働いたことはない。日本人はハードワークだ。」と言っていた。それだけに週末は大きな息抜きの時間で、一人ずつ与えられている自転車で、2〜3km 離れた大田原や西那須野の町へショッピングに行ったり、ボランティアと一緒にサイクリングで遠出をしたり、市の体育館でバレーボールをしたり、寮で休んだり、特に土曜の夜は好きな仲間が集まって「ドリンキングセッション」をしたりして骨休めをするのである。

3) ARI の訓練カリキュラム

ARI のカリキュラムは大別して、(1)朝の全体集会、(2)チャオ、(3)農場作業、(4-1)教室での学科に関する授業、(4-2)その他の教室でのセッション、(5)個人プロジェクト、(6)見学旅行、(7)特別プログラム、(8)コミュニティワーク、(9)収穫感謝祭の9項目に区別されている。

これらのカリキュラムは、食生活や寮を始めとするコミュニティ生活、各種委員会活動などと組み合わせて、筆者の言う「新しい生活世界の形成をめざしたコミュニティ・アプローチ」を構成しているわけである。以下、トレーニングハンドブック (T. H. B.) の記述にしたがって、カリキュラムの説明を行う。

(1) 朝の全体集会

朝の全体集会の30分間については、前稿で T. H. B. の記述をかかげて、その前半15分の礼

「わかる」ということの多層性について（Ⅳ）

拝部分に関して ARI がとる異宗教の受容と尊重の態度と、農村リーダー訓練における宗教的精神的な価値の重視の姿勢について述べた。朝の集会の後半の部分は主として前日までの活動の報告と当日以降の計画や予定の告知にあてられ、集会の場で発言したいメンバーはだれでも発言することができる。

司会者はコミュニティの全メンバーが交代であたり、その当番は教務が発行配布する月間スケジュールに明記されている。当日の司会者は報告と告知に分けてメンバーに発言をうながす。各セクションのフォーマルな報告や告知事項に加えて、学外に出張してきたメンバーの簡単な用務の報告や感想、病欠して休んでいるメンバーの状況、研修生が国元から受取った手紙で伝えたい内容（家族の結婚や病気や死亡、子供の進学など）、卒業生から ARI に届いた手紙の内容、送り出し団体からの手紙の内容、国での紛争や動乱の模様、私的な事柄であってもみんなに伝えたいこと、など自由に発言することができる。

またその日に誕生日を迎えたメンバーがあれば「ハッピーバースデーの歌」が歌われることもある。

このように朝の全体集会は短い時間であるが全員が集い、精神的統合のための礼拝の部分とメンバー間に、コミュニティに起っていること及びメンバーそれぞれのことについて情報の共有を確保する部分の両面で不可欠の時間となっている。出席率も病気や出張で不在の者をのぞいてほぼ100%に近い。

集会の司会は、原則として週の始りの月曜日は校長が行い、その週の精神的なオリエンテーションを与える聖句が読まれ話が行われる。その意味で校長の朝の集会に占めるウエイトは重い。火曜から土曜日の司会は全メンバーが平等に交代で分担するように計画される。各メンバーが司会者として行う礼拝部分の内容と、報告と告知部分の司会ぶりは全メンバーの前でなされる個性的な表現となる。

4月から12月中旬まで約38週あり、週日は228日だから60人余の全メンバーでは一人あたり3～4回の司会が当ることになる。引込みがちの者、普段は多弁ではないが深い宗教的動機を持ちそれを表現するもの、まじめな者、快活でユーモアに富む者、異文化異宗教の一部を表現する者、ARI に来るまでの生活史を語る者、民族音楽やコーラスを聞かせるもの、順番が当たってしかたなしに形どおり事を運ぶもの、何日も前から語る内容を準備してノートしている者、などさまざまな個性が発揮され、メンバーがお互いを理解する場としても重要な機会となっている。

しかし朝の全体集会は時間が限られているので生起してきた問題について討論したり合意や決定を作り出す作業は金曜日に行われる反省計画会や各種委員会や職員会にゆだねられる。問題提起が朝の集会でなされ、上記の機関でよりくわしく検討しようという場合も多い。

朝の集会では学外からの訪問者や滞在者も参加することが求められ、自己紹介と ARI を訪

ねた理由などを簡単に話すことが求められる。訪問者にとっては ARI のコミュニティとしての雰囲気の良い部分を30分程の短い時間の中で感じとることのできる場となっている。

(2) チョア（毎日の定常作業）

「コミュニティを支えるために我々は毎日のチョアを行う。それは ARI での農村リーダー訓練プログラムの中心的で統合的な部分である。定常的なチョアを行う中で我々は共に働くことによって共に学ぶことになる。チョアを最もよく絶えざる努力で行うことで、我々はできるかぎり安全で健康な食生活を保持し、環境整備委員会の宣言に示されている目標を実現することができる。(THB, B-10)」

チョアは毎日全メンバーが分担して朝食前 1 時間半、夕食前 1 時間行う定常作業であり、作業グループは以下の 9 グループである。

- 1) 「清掃と管理」 本館の内外の清掃と整頓
- 2) 「牛、山羊、羊の世話」 朝夕 2 回の飼料やりと清掃、搾乳、堆肥づくり等の作業
- 3) 「作物野菜」 作物野菜の世話と収穫、堆肥づくり
- 4) 「エコシステム」 キャンパスの美化、草刈、花や木や森の管理、水路や土手の保全
- 5) 「食品加工」 ジャム、ヨーグルト、ハム、パン、みそ等の食品加工
- 6) 「養豚、養兎」 ブタとウサギの飼育、清掃、堆肥づくり
- 7) 「養鶏」 産卵用、ブロイラー、アヒル、がちょう、ホロホロ鳥のエサやり採卵、清掃
- 8) 「食堂」 ARI 内部で食事をするメンバーの朝と夕の食事の準備。
- 9) 「メンテナンス」 農業機械や道具、車輛の修理、土木工事

これらのチョアで行われる作業はコミュニティ生活全体の必要を充すため全メンバーで分担して行われ、その配置やローテーションはチョア調整委員会によって決められ、本館の玄関に掲示される。

9つのチョアにそれぞれ、職員、ボランティア、インターン、研修生が作業量の大小に応じて割り当てられる。職員とボランティア、インターンは各チョアの指導者とその補助となってチョアを通じてのそれぞれの分野の実践的指導を行う。チョアは、必要な作業としてだけではなく、一つの重要な研修項目としてカリキュラムの中に位置づけられている。

職員は 2～3 年以上の間隔ではチョア指導の分担を交替しあうことにより、一分野のスペシャリストになって他の分野は指導できないという固定化を避ける配慮を行っている。しかしその年度内では長期出張などの場合をのぞいて交代することはない。ボランティアも職員の補助として、他の用務で抜けることも多い職員がいない時には、そのチョアのリーダーとして指導する立場になるので、半年を単位として希望により役割を交代するという形をとっている。

しかし研修生には、コミュニティ維持と食糧生産に必要な全部の部署を経験することがリーダー訓練の上で重要であるという配慮から、2 週間交代で 9 つの部署を交代するというローテーションが組まれている。

全員が参加するチャオのやり方は ARI のコミュニティ・アプローチの特色をよく表現している。このやり方は体制のいかに関わらず近代化した社会が必然的に生み出す機能的な専門分業と、それに必然的に伴う支配―被支配関係を止揚するねらいを持っている。メンバー全員参加の話し合いによる直接民主主義的なコミュニティの意志決定プロセスと、必要な仕事の全体を交代しながら固定させない流動的分業とは、ヤマギシ会などのコンミューンの運営にも原則的に見られる方式である。

また、研修生がコミュニティ維持に必要なすべてのチャオを全部経験することは、コミュニティづくりの全体を見渡す知的枠組と体験を与えることになり、特定分野のスペシャリスト養成とは異なるコミュニティ作りのジェネラリスト的リーダー養成をめざす ARI の訓練の特性を具体化する方式となっている。

しかし、一方では、稲作や養鶏などの特定分野の知識や技術の習得を第一義に希望している研修生からは、二週間毎のチャオ交代に関して反省と計画の会議の際に苦情が出ていた。二週間交代では、その分野の季節的サイクルの重要な部分を経験できないまま別のチャオに移行することになり、希望している知識や技術を習得できないというわけである。

この問題は ARI の訓練プログラムが、特定の農業技術のスペシャリストの養成を目的とするのではなく、草の根レベルの農民のコミュニティづくりのリーダーとして全体的な視野をもったリーダーを養成しようとしている原則と。しかも同時に個人プロジェクトの形で、各研修生が自分の働く地域にとって一番有効で必要と思える分野の知識や技術を習得する機会をも提供していることと。二つの課題を8カ月半の短期にやらなければならないという時間的制約から必然的に出てくるジレンマである。

この件に関しては、チャオのローテーションの原則は変えずに、個人プロジェクトの時間を長くするという前記の措置が取られることになった。また秋学期にはローテーションを機械的にせず希望するチャオに留まれる制度になっている。

1日3時間のチャオの時間は、知事認可の専門学校としての学則に規定された必要授業総時間数1760時間中の約570時間(30%)余りを占めるので、規則による実習時間320時間を大幅に上まわり、教室での授業時間の不足を制度上では生み出すことになる。それでチャオの時間の一部を、講義や理論的学習の時間としてカウントできるような工夫の必要と、毎日なされるチャオの時間を墮性に流れないで学習時間として充実したものにする工夫の必要が、反省と計画の時間や職員会でしばしば問題とされてきている。

(3) 農場作業 (Farm Work)

「ARI の食生活と食糧自給を実現するために、研修生、職員、ボランティア、インターンは積極的に農場作業に参加する。訪問者もまた参加するよう招かれる。作業の内容、優先順位、組織についての計画と実施は、それに関わる研修生と参加者によって行われる。(THB, B-2)」

農場作業は、毎日のチャオではできない農作業を分担して毎週火曜日と金曜日の2回4時間～6時間行うものである。火曜日の朝の集会のあとの時間にその週の2回の作業内容と分担が決められる。この分担はその時期の必要に応じて（ほぼチャオの仕事に対応して）7つから8つの作業グループに分けられ、職員・ボランティア・インターンは指導役として固定して、研修生は自分の個人プロジェクト関係の作業を選ぶ傾向があるが、各自の希望によって2～4人ずつ配当される。

例えば4月のある日の作業内容は、1. 畑仕事、2. 水田のアゼぬり、3. 牧草地の鋤き返し、4. 豚の去勢、5. 兎の屠殺解体、6. エンジンジャム作り、7. アヒルの屠殺解体、8. 鶏舎の柵の修理、であり、時期に合わせて内容は変化する。

（4-1） 教室での学科に関する授業

「教室は研究と学習のための一つの重要な場所である。それは重要ではあるがしかし学びの唯一の場所ではない。そしてARIではコミュニティ生活と活動のすべての側面が訓練の時間であり材料であると見なされている。以下の四つの科目（aからd）と日本語のクラスが1987年度では定期的に提供される。また関心にしたがって数多くの特殊講義が行われる。

a) 第三世界指導者論（高見敏弘）

このコースでは研修生が、既存および現われつつあるリーダーシップの諸類型とそれらが第三世界において関連し活動するメカニズムについて、特にそれらが農村開発活動に関連するメカニズムについて確かめ理解することをめざす。同時にまた教室での実習においてARIコミュニティのリーダー訓練活動の期間の中で、どのようなタイプのリーダーシップが現われてくるかについても光をあてるであろう。

b) 時事問題（高見敏弘）

このセミナーでは今日われわれの世界が直面しつつある基本的な諸問題を取りあげ深く理解するための共同努力を行う。我々は第三世界に現存する重要な諸問題に注目し、それらがいかに都市化した産業社会の生活スタイルに密接に関わっているかについて見るであろう。討論と資料の読み込みを通して研修生が自らの分析用具を鋭敏にすることをめざす。

c) 農村生活における精神性（グレッチェン・デブリーズ）

このコースの目的は農村生活におけるより深いレベルの精神性を獲得することを助けることである。特に生産、コミュニティ内での分配、食生活のあり方の領域についての討論が行われる。聖書が基本的ガイドとして用いられるが、同時に他の宗教的信仰をもっている研修生お互いから学び合う。

d) 自立のための食糧生産

これらの授業は主として経験のあるARI職員によって指導される。ここARIおよび第三世界における食糧生産にとって関連をもつ諸問題と技術的側面について討論する。

I 有機農法（三浦照男）

(1)有機農法の一般的な考え方——有機農法とは何か。起源、定義——有機農法の諸類型——科学農法と有機農法の比較、(2)有機農法の技術——肥沃な土壌の形成：堆肥、発酵有機肥料（ボカシ）——病虫害制御——雑草制御。

II 畜産（久保祐輔，長嶋清，野崎威三男）

(1) 家畜飼育の推進、(2) 家畜の再生産、(3) 家畜の栄養、飼料と給飼、(4) 家畜の健康と衛生

III 温度差と熱帯園芸——日本とタイの園芸比較（長嶋タラトン）

(1) 植物学——日中と夜間の植物の生理的活動、(2) 植物成長への影響——温度、湿度、(3) 植物成育への

「わかる」ということの多層性について (IV)

影響——花、芽の分化、日照時間と湿度、(4) 温帯での熱帯植物の栽培可能性、(5) 亜熱帯での温帯植物の栽培可能性、(6) 熱帯での温帯植物の採種可能性、(7) 園芸実践の比較——移植、除草……、(8) 水利——いくつかの方法と技術、(9) 穀物と土壤に関する季節の意味、(10) 普及のメカニズムと技術

IV 農業機械（菊地創）

(1) 農業機械化と適性技術——機械化の目的と問題——村の技術——再生可能なエネルギー源——資源の利用可能性、(2) 農場工作所の装備——設計——基本的な道具と機械——安全保持、(3) ARI の食糧生産に対する農場工作所の役割——機械と道具の修理と維持——農場の構造作り——コンクリート作業——木工と金工：溶接と鍛造——電気回路と電線布設——錘線測量

V-1 栄養学（宮岡明子）

基本的栄養と病気——食物と薬物——現代日本の食習慣の問題点

V-2 食品加工（安井武雄、渡辺純子）

食品加工の意義と必要性——アジアにおける食料保存——保存方法——食品加工と衛生

V-3 農場経営（野崎威三男）

経営のタイプ——農場経営——農場計画と予算——記帳

e) 協同組合（楠 利明）

社会経済的、政治的その他において周辺にいる人々は彼らの問題を解決すべく新しい価値の組み合わせを創造するために自らを組織するようにしなければならない。相互扶助の哲学に基づいて人々は協同組合を作ってきた。このような哲学に含まれている基本的な考え方とは何か。どんな問題と未来展望があるのか。農村開発の努力にとって何が協同組合運動を意味あるものとするか。農業協同組合についての学習と ARI 信用組合と消費組合のワークショップが行われることになっている。

f) 日本語クラス（高見泰子）

日本語の基本的なあいさつと簡単な慣用句（月、数、日など）——簡単な日本語での質問と答え——日本の文化と習慣の理解——日本語を読み書きすること——ひらがなとカタカナ。日本語を学ぶ目的は日本とその他の人々をよりよく理解することにある。日本語を学ぶことはあなたが個人プロジェクトのために近隣の農場へ出かける時に特に役立つだろう。そのためには日本人と日本語でコミュニケーションしなければならないのだから。

(4-2) その他の教室でのセッション

a) 研修生のセミナー

教室でのセッションの一部として各研修生は自ら三つのセミナーをする機会が与えられる。これらによって我々は他の研修生の状況について学ぶことができる。各々のセミナーの目的は以下のようである。

1) 春学期（4月～7月）自己紹介セミナー

研修生各々の関心、背景、関わっているプロジェクト、地域の状況、直面している問題、送り出し団体などについて紹介する。

2) 秋学期の初め（9月）個人プロジェクトの報告セミナー

週毎に行ったのと、夏期に行った個人プロジェクトの報告と討論。そのプロジェクトを選んだ理由と自分の（帰国してからの）仕事との関連

3) 秋学期の終り（12月）未来計画セミナー

あなたの未来の仕事、地域の必要のための計画、あなたの未来の任務に対する ARI での経験の評価報告は農村の人々にも理解できるようにわかりやすいものであるべきである。視聴覚機材、表や図の使用が望まれる。各研修生は各々のセミナーに30分～40分の時間が与えられる。

b) フィルム、ビデオ、スライドセッション

これらのセッションの目的は ARI の研修プログラムに役立つ視聴覚の教材を提供することである。それらの機材のいくつかは ARI のものであり、他の機材は種々の団体から借用するものである。これらのセッションは研修調整委員会によって計画実施される。

c) 反省計画会議（毎週の）

ARI の訓練プログラムにおいては、反省と計画の過程への積極的な参加が特別に重要である。研修生、職員および他のコミュニティメンバーは単に食糧生産活動のみならず ARI で生活のすべてをカバーするこの会議に参加することが求められる。

訓練プログラムの指導原理はコミュニティ活動のすべての側面への平等で自由な参加である。有意義な計画づくりのためには——情報集め、コミュニティが何を必要としているかの認識、決定にあたっての優先順位などの諸点が考慮されねばならない。

計画の実行と評価はコミュニティの全メンバーが参加するのであるからそれはもう一つの重要なプロセスである。このことはまたリーダーシップの能力を発展させ実習するのによい機会である。

d) 特別講義

研修生の共通の関心にしがって、我々は通常の授業はできない特別講義を準備する。しばしば外部からの専門知識をもった講師が招待される。これらの特別講義は研修調整委員会によって準備される (THB, B2～B5)。」

以上が教室で行われる授業とその他のセッションの T. H. B. に記述された性格づけである。

筆者はそれらのうち、a) から f) の学科及びフィルム、ビデオ、スライドセッションには部分的に、研修生セミナー、反省計画会議、特別講義にはほぼ全面的に出席してその内容をノートしたり、ビデオで録画したりする機会をもった。

a) から f) の ARI 職員による授業の概要は T. H. B. の記述でよく要約されている。これらすべての授業は英語でなされ、担当者の個性と科目の内容によって授業の中味はさまざまであり、それらに対する研修生の側の反応や発見やくりひろげられる討論も種々であった。

英語が苦手な授業内容や討論についていけないので、英語のクラスを別に行ってほしいという希望が一部の研修生からあって、5月2日から5日の連休期間の集中コースをスタートとして、以後毎週1回夕食後の時間に研修生のための英語クラスが持たれることになった。このクラスへの参加者は、タイ3名、スリランカ2名、インド1名、エルサルバドル1名、インドネシア1名、韓国1名であった。集中コースの講師は、外部からの米人協力者、それ以後の講師はジーンが行った。研修生の英語の能力や学歴の差によって、大学教育を母国で修了しかつ英語のよくできる研修生にとっては、科目によっては内容が初歩的すぎてたいくつだという感想をもらす者もいた。英語の苦手な研修生は辞書を机において必死で聞いていたり、内容についてゆけずに居眠りをしていたり、様々な反応が観察された。討論の盛り上がりも、いろんな意見が出て時間を超過したあげく、次回に引き継ごうという場合もあったし、形どおり静かに終るケースも見られた。これは講義担当者の討論のリードの仕方や、研修生の担当者への好悪や評価も関係しているのは当然のことである。

出席状況も必ずしも全員出席とはいかず、体調が悪いと言って欠席する者、中にはずる休み

「わかる」ということの多層性について (Ⅳ)

をしているのではないかと思わせる研修生も見られた。出欠については職員はあまり厳格ではなく「自発性の原則」を尊重する余り、出欠をとることに對してルーズになつては、学校法人としての立場上よくないので、出席を強制しないにしろ、出欠だけは担当者がきちんと記録しておくべきだ、という反省が年度末の職員会で出されていた。

「ARI では授業にしろ、チャオにしろ出席を強制されない。だから自己規制をして自発的に何でもやらなければならないのだ。」という感想を筆者に語った研修生もいた。自発性の原則を貫いて、外的な強制や罰則なしに ARI の研修は相当高いレベルの緊張と集中を維持しながら行われているように見える。それは研修生の側での「自分は草の根の農民のために働くリーダーだ」という自覚とモラルと、自立性、自発性を重んずる ARI の理念とその実現をめざして共に働き共に生活する職員やボランティアの作風とが出合つて形成される共感が作りあげているものであると思われる。しかし、そのように理念通り ARI での学びがうまくいかないケースも当然ある。それらについては次稿で述べたい。

(5) 個人プロジェクト

「研修生とその送り出し団体が奉仕している人々の関心と必要にかなうために ARI は個人プロジェクトの学習機会を提供している。自らの属する地域的狀況と ARI のもつ資源の利用可能性とを考慮して、研修生は自らの個人プロジェクトを選ぶことが求められる。職員のコンサルタント1名がプロジェクトのテーマと実施について助言するように配置されている。自らのプロジェクトを慎重に計画することはそれ自体重要な学習機会となる。プロジェクトを選択・計画・実施する責任は自分自身のものだが（君のコンサルタントが助言するにしても）そのテーマは君の属する地域の条件に適するような特定された具体的なものではない。

春学期には毎週半日、夏学期には4週間、個人プロジェクトのための時間が取られる。秋学期にも同様に時間が与えられる。

各々の学期の終りに君の個人プロジェクト作業についての文書及び口頭での報告が求められる（研修生セミナーの項を参照）。これらの報告を準備発表することは大切な技術であり、君自身の自己訓練の一部と見なされるべきである。というのは、報告書を書くプロセスは学習とリーダーシップの重要な一部であり、それは君のコンサルタントの助言によって準備されるべきである。

我々はそれらの報告書を ARI の図書室に保存し、将来の研修生たちがその訓練プログラムにおいて利用できるようにするつもりである。報告書は明瞭にタイプするか活字体で書くこと。報告書を書く場合のモデルは次のページに掲げてあるので参考にとすること。（THB, B-5）」

1987年度の個人プロジェクトのタイトルは、前稿の研修生の一覧表に列挙しておいた。春の期間は学内で週半日の短時間でそれぞれがコンサルタントと相談して選択した個人プロジェクトが行われた。例えば筆者も参加した、有機農法の個人プロジェクトでは、指導者の三浦が、各個人に畑の一区画（約6～7m²）を与えて、そこへ好きな作物を植えさせ、堆肥づくりの実習を2サイクルぐらいやらせるという形で行われた。長嶋指導の養鶏では、空になっている鶏舎に300羽くらいのヒナを導入して、その飼育を実際にやってみるということを行った。

第10表 ARI 研修生実習先一覧表 (ARI 1987年度研修報告書より)

個人プロジェクト

グループ学習および個々の持っている課題に取り組む個人プロジェクトの時間が春学期には隔週、秋学期には毎週設けられた。また夏学期には各自五週間（内一週間は学院内での農場実習）をプロジェクト学習として用いました。

各研修生には、職員がコンサルタントとして課題の選定、学習方法、場所等について協議実施しました。

夏期プロジェクトでは校外での学習、見学等が重要な学習方法であり、各地の農家、農業関連産業、試験研究機関、手工芸家、福祉施設等、多数の方々の協力と指導を得ました。学んだ知識や経験、技術は帰国後の農村地域開発のために役立つと思います。

本年度研修生達が取り組んだ課題、実習指導受入先は次の通りです。

金子美登 (有機農業)、ぼっこわば農場—ドニー・ビリオ (有機農業)、ウインド・ファミリー—上田正 (有機農業・養豚)、大平広 (有機農業)、五十嵐政人 (有機農業)、福岡正信 (自然農法)、仲沢正雄 (果樹)、山崎恵広 (畑作)、森田利徳 (畑作)、ヤマギシズム大田原実顕地 (共同生活・養鶏)、新フッタライト大輪キリスト教会 (共同体生活・養鶏)、沼尻ふ化場 (ふ卵・養鶏)、居島久二 (養鶏)、椎名ふ化場 (ふ卵・アヒル)、藤沢稔 (養豚)、坂本安靖 (養豚)、長岡正 (酪農)、菊地庸博 (酪農)、新宮照敏 (養豚)、中紙麦平 (酪農)、中紙栄人 (酪農)、黒田剛嗣 (酪農)、辻伸一郎 (酪農)、池森邦雄 (酪農)、関根禎行 (養魚)、埼玉水産試験場 (養魚)、下鳥養蜂園 (養蜂)、自由学園工芸研究所 (手工芸)、萩原高山植物研究所 (手工芸)、帯広ニット (手工芸)、八木沢啓造 (竹細工)、川谷保育園 (幼児教育)、風の学校—中田正一 (農業教育)、カナンの園・小さき群れの里—本庄義雄 (社会福祉)

特別研修生が取り組んだ課題、実習指導受入先

栃木県畜産試験場 (鶏の育種改良・肉牛)、轟勝一 (養鶏)、高橋一 (養鶏)、昭和ふ卵研究所 (ふ卵器製造)、日本サンファーム (鶏の屠殺・解体)、自由学園那須野農場 (酪農)、那須農業高校 (牛の人工受精)、風の学校—中田正一 (井戸掘り)、みかど育種大多喜研究農場 (野菜育種)、栃木不二商会 (農業機械)、クボタ農機 (農業機械)、日本バプテスト同盟 (日本の教会活動)、萩原高山植物研究所 (高山植物)、下鳥養蜂園 (養蜂)、アジア保健研修所 (地域医療)、(干し柿作り)

夏学期には4週間主として学外の専門農家や団体へ実習に出かけた。実習生を受け容れた農家や団体は上記の第10表にまとめられている。

(6) 見学旅行

「見学旅行は訓練プログラムの中の最も活々とした重要なものの一つである。研修生は農業を含む地域開発の努力にダイナミックに関わっている人々や団体を訪問する多くの機会をもつ。このプログラムの計画と評価には研修生も参加するよう招かれている。年間を通じての見学旅行には以下の三つのタイプがある。

a) 週毎の見学旅行: ARI の (週間) カリキュラムの枠組の中で毎週一度、近隣の農家、学校、工場、研究センター、福祉施設などを訪問する。

b) 長期の研修旅行

1) 北日本研修旅行。春学期の間に、日本の北部へ旅行する機会をもつ。そこは日本の主要な農業地域である。グループは二つに分けられ、旅行は約一週間である。

2) 西日本研修旅行。秋学期 (11月末)、約10日間西日本を旅行する機会をもつ。日本のこの地域は主として高度に産業化された都市社会であり、現代社会のさまざまな問題が出そろっている。

c) 個人プロジェクトに関する見学旅行。

ARI での研修期間中に研修生は、彼あるいは彼女自身の個人プロジェクトの分野に関係する種々の場所

第11表 1987年度,ARI 見学旅行,東北旅行,西日本旅行

1987年度 春学期 見学旅行 (教務資料より)		Bグループ日程 7月14日(火)～20日(月)	
1) 4月11日(午前)	アジア学院近隣の農家施設	14日	山形県高島町・高島町有機農業研究会(稲作, 果樹, 野菜, 畜産, 懇談会)
2) 4月18日(午前・午後)	馬頭町植林活動	15日	小国町・独立学園高等学校(学校教育), 村山市・白鳥八日会, 戸沢農協(農業協同組合), 白鳥八日会会館に民泊
3) 4月25日(午前)	①郷土資料館 ②町役場 ③中央公民館 ④図書館	16日	白鳥八日会(稲作, 果樹, 民俗料理披露, 懇談会)——引き続き白鳥八日会会館に民泊
4) 5月2日(午前・午後)	西那須野地域の農業(稲作, 蔬菜, キノコ)	17日	白鳥八日会送別会 (宿泊)福島県猪苗代へ移動
5) 5月9日(午前・午後)	コミュニティ農家	18日	福島県猪苗代町・福島県内水面水産試験場(淡水魚養殖), 会津・山田漆器(漆器), 会津栄町教会(農村教会), 会津地区教会に各々民泊
6) 5月16日(午前・午後)	①大輪フッターライト共同体(養鶏・野菜)	19日	各教会で礼拝出席, 後吾妻高原へ移動
7) 6月6日(午前・午後)	②ヤマギン会大田原支店(養鶏・酪農)	20日	福島県西郷村・萩原高山植物研究所(手工業), 栃木県那須町・南ヶ丘牧場 (稲光牧場)
8) 6月12日(午後)	③西那須野地域の農業(養豚・酪農・養魚) ④反公害運動(田中正海氏より学ぶ) ⑤足尾銅山 ⑥佐野歴史資料館 ⑦谷中遊水池 ⑧黒羽ロータリークラブ(昼食会)交流		Aグループは1000kmを, Bグループは862kmを各々走行し, 両グループとも無事にアジア学院に帰着。
9) 6月18日～20日	⑨川西中学校(中学教育)交流		Aグループ——同行職員3名, 研修生16名 Bグループ——同行職員5名, 研修生15名
ニグループに分れて見学		西日本研修旅行日程表 (「アジアの土」第50号, 1987年12月より)	
A) 富里町(千葉県) 町役場, 交流会 ミカド育種会社, 風の学校, サンファーマ(大流町)		11月	場 所 視 察 見 学 先
B) 埼玉淡水魚センター(加須市) 金子有機農場(小川町), 森シイタケ会社(桐生市)		14日	東 京 アジア学院出発, イスラムセンター, 東京ユニオン教会
訪問先及び主な見学・研修内容		15日	東京/中野市 東京ユニオン教会日曜礼拝出席, 長野県中野市へ
6日 福島県白河市・白河種畜場(鶏育種改良), 舟引町・村上農場(有機農業)		16日	中 野 市 農協, 果樹農家訪問, 農業青年との懇談会
7日 岩手県盛岡市・向中野学園(学校教育), 盛岡市民福祉バンク(社会福祉)		17日	食品加工工場, 酪農家訪問, 滋賀県野洲町まで移動
8日 盛岡市・みちのくアカネ会(ホームスパン, 手織りもの), 奥中山・菊地酪農(酪農業), 奥中山教会(農村教会), 奥中山農協(農業協同組合)		18日	(バス移動) へ琵琶湖を通り越して一気に広島まで～
9日 宮・カナンの園三愛学舎小さき群の里(社会福祉)		19日	広島 Y M C A, 平和記念公園, 原爆資料館訪問, 午後岡山県武部のセンセン教育センターへ
10日 宮城県志津川町・志津川漁業組合(養殖漁業), 北上町・熊谷農場(半農半漁業家), 田尻町・田尻教会(地域社会)——田尻町農家に民泊		20日	「第9回アジア・アフリカ青年協力奉仕セミナー」に参加
11日 田尻町内移動・田尻町役場 岩瀬農具製造所(農具製作), 岩出山町竹細工指導所(竹細工), 田尻ハム(食品加工), 渡辺種子(農産場(野菜種子栽培)——田尻町農家に民泊)		21日	午後セミナーを終え, 大阪南 Y M C A へ
12日 田尻教会礼拝出席 福島県福島市・上川農場(果樹栽培)		22日	ホストファミリーと共に行動, 都市, 労働問題等, 課題別グループ学習(23日とも)
		24日	午前中京都市内観光, 浜松まで移動 (一部, 名古屋のアジア学院後援会々々と交流, 於: 名古屋市)
		25日	聖隷福祉事業団, OISCA, 市内の農家訪問
		26日	スズキ自動車, カワイ楽器工場見学
		27日	自然農法国際研究所を訪ねた後, 一路西那須野へ約300kmの旅, 夜帰校

「わかる」ということのも多層性について (IV)

を訪問する多くの機会をもつ。

これら三つのプログラムの主目的は以下のような諸点である。

I ここ ARI の中では得ることのできない種々の技法や技術、知識、情報、観察を得ること。

II 異なった地域プロジェクトの観察を通して、さまざまなリーダーシップの型、イメージ、役割を学ぶこと。

III 日本の地域社会のシステムを学ぶこと——個人、家族、コミュニティの組織と役割。日本の人々やコミュニティと交流をもつこと。

IV (旅行の計画実施を通して) ARI の研修生に自らリーダーシップの能力を発揮し発展させることと、グループダイナミックスの訓練をすること。

V 日本の自然の美、歴史的遺産、文化的場所を訪ね学ぶこと。

VI 国際交流を進めること。

上記の見学旅行と二つの研修旅行のために研修生は文書での報告の提出を求められる。(THB, B-7)』

これらの見学旅行や研修旅行にはほとんど筆者も同行したが、その概要は第11表に示す通りである。筆者自身にとってもこれらの機会が新鮮な学びの時となった。

(7) 特別プログラム

「我々はしばしば 国際理解 と交流を目的とする他の団体が行うさまざまなプログラムに参加することを求められる。それらは高校、青年団体、教会団体などである。これらは ARI のことを日本の人々に宣伝する機会であると共に日本の社会と人々について学ぶ機会でもある。(THB, B-7)」

1987年度に行った特別プログラムは第 8 表のとうりである。その他に、7 月 1 日と 2 日, ARI と「砂漠に種を播く人の会」の主催で、福岡正信氏を講師として「自然農法²⁰⁾」についての講演会が行われ、学外からの聴講者を加えて100名余りの人々が、講演と討論に参加した。

(8) コミュニティ作業

「毎月 1 日あるいはそれ以上がコミュニティ作業にあてられる。この時間は我々のキャンパスと設備建物を維持するのに必要な共同の仕事にすべてのコミュニティメンバーが共に働く機会を与える。

春の田植え、秋の稲刈はコミュニティベースで、食糧生産のこの重要な部分を共有するすべての人々と共に行われる。ARI はコミュニティの各メンバーが農場作業（食糧生産と加工）に毎月一回は参加するように勧めている。(THB, B-7)」

コミュニティ作業は上記の田植え（5 月18日）、稲刈（10月 1 日）の他に 4 月 9 日は入学式準備のための学内整備清掃、6 月 1 日は馬頭町学校林の植林作業、10月 5 日～9 日は、収穫感謝祭準備作業、当日運営（10日、11日）後かたづけと清掃（12日）、12月11日は卒業式準備のための学内整備清掃、2 月24日は学校林の植林準備作業を行った。

(9) 収穫感謝祭

収穫感謝祭について T. H. B. B-8 は以下のように規定している。

「目的：神に感謝を捧げる

我々は食べ物の収穫に感謝するだけでなく、個人的な成長とコミュニティとしての成長と収穫に、そのた

「わかる」ということの多層性について（Ⅳ）

めの障害や困難をも含むすべての我々の経験に対して感謝する。

我々は喜びと分ちあいの精神によって週末に我々と共に加わる多くの人々と共に祝祭を行う。

礼拝をささげることと分ちあいを通して

我々自身と隣人たちのため喜ばしい祝祭の時を持つ。

お祝い……参加し……コミュニケーションする

我々が受取った豊かな贈り物に対して神に感謝を捧げる。

米、麦、豆、野菜、豚、鶏、山羊、兎、ARI の運営を支えるためのお金、我々が作りあげた友達、我々が持つに至った数多くの学びの経験。

我々は神に次のようなし方で感謝を捧げる。

教会のメンバーや近隣のコミュニティの人々と共に礼拝の時間を持つことによって。

ARI, 研修生, アジア・アフリカの国々についての情報を分かちあうことによって。

われわれの文化的な伝統を表現するために我々の才能を分かちあうことによって。

我々の友人と共にこの祝祭の時を作り出すために時間と労働を分かちあうことによって。

注意：この祝祭は経済的に独立採算でなければならない。収穫感謝祭の準備と実施はすべての者にとって貴重な自己訓練の経験である。」

78年度の収穫感謝祭は10月10日（土）体育の日で休日、11日（日）の二日間にわたって行われ、休日続きと晴天という好条件にも恵まれ、二日間で延べ3000人～4000人の学外からの参加者を迎えた。林の中の野外ステージでは午前中は礼拝、午後は二時間半にわたる演芸会（研修生の紹介と各国の舞と歌及び劇）が行われた。本館2階の展示室では、アジア学院の紹介、研修生のプロフィール、研修生の国々の紹介、卒業生のはたらきに関する写真や図や民芸品による展示、ARI ヘルプのスライド付きの紹介。図書室では各国の研修生が持参したり、他の NGO が出張して持込んだ民芸品の販売。本館脇のテントでは無農薬無添加の ARI で生産した農産物、加工品の販売。校庭では各国の民族料理（昼食とスナック）の販売。子供向きのゲーム。トラクターに引かれた車での ARI キャンパス巡り。など多彩な催しがなされた。

収穫感謝祭の計画と実施は ARI の訓練プログラムの一貫として位置づけられており、87年度は、7月21日から、職員（1名）、研修生（2名）、ボランティア（1名）の総括実行委員を決め、礼拝、民族料理、民芸品販売、情報、場内整備、演芸の各パート実施委員と仕事の内容及び各委員長、書記、会計を決めて準備にかかった。各パートの実施委員会はそれぞれ夜の時間集って準備を重ねた。10月5日～9日は丸5日間準備作業に集中し、祭典の10日と11日を迎え、12日はあとかたづけという形で成功裏にこの行事を終えた。この祭典の収支は収入が370万円余、支出が300万円余で約70万円の余剰金を生み出し、T. H. B. において要請されている経済的な独立採算も十分に達成された。

この余剰金の使途については10月30日の反省会で全員が参加して話し合われ、研修生の中には、我々の努力で得た金だからそのうちの何%かは研修生に分配すべきだという強い意見も出たが、最終的には今まで外部から借用していたテントを ARI の備品として別に購入するのに30万円、寮の設備充実に10万円、87年度卒も含めて卒業生のプロジェクトに20万円、福祉事業

への寄附が5万円という使い方をすることに決定した。

冬学期の個人プロジェクトの延長

「冬学期のすべてあるいは一部の期間に、研修生の中には、卒業式の日を超えて君の個人プロジェクトの学習を延長したいと希望する者もいるであろう。その場合の手続は以下のとおりである。

- 1) 個人プロジェクト延長の希望についてコンサルタントと話をする。
- 2) 学習プランを、君が学ぶことの特定された理由づけと、それに要する一定の期間と共に書類にして、それをコンサルタントに提出する。
- 3) 君の送り出し団体に手紙を書いて、君の特定の学習プログラムのために滞在を延長することの承認を得る。
- 4) 送り出し団体からの承諾書は ARI に11月1日までに提出しなければならない。
- 5) ARI の職員は君の要請を検討し、その決定について助言を与える。(THB, B-8)」

第12表 1987年度、冬季個人プロジェクト（「アジアの土」第51号、1988年3月より）

研修生氏名	(国 名)	研修課題
① エリアス・ブゴケ	(タ ン ザ ニ ア)	養豚、養鶏
② M・ゴッドフレイ	(ウ ガ ン ダ)	養鶏
③ P・カメイ	(イ ン ド)	手芸
④ セレナー・バルイ	(/)	洋裁
⑤ B・N・キム	(バングラデシュ)	竹細工、装飾品加工
⑥ クララ・ビスワス	(/)	栄養・給食
⑦ M・サーカー	(/)	養鶏
⑧ K・スリパセー	(ス リ ラ ン カ)	職業教育、鉄工
⑨ ジャヤンテー・M	(/)	竹工芸、社会福祉
⑩ C・チューチャイ	(タ イ)	花栽培
⑪ T・ナロン	(/)	家畜飼料、養豚
⑫ P・ウィチェン	(/)	肉牛飼育
⑬ R・チャチャイ	(/)	養鶏一般、育すう

くうち、⑫、⑬は文部省留学生で、2年目の研修中)

実習・見学先一覧

- 〔岩手県〕 カナンの園・小さき群の里(一戸町)
- 〔福島県〕 大内農場(二本松市)、石沢養鶏場(郡山市)、萩原高山植物研究所(西郷村)
- 〔栃木県〕 県畜産試験場(芳賀町)、藤沢養豚場、日本サンファーム(以上小川町)、大金養豚場(馬頭町)、樋口彰一(茂木町)、八木沢啓造、轟養鶏場、高橋養鶏場(以上大田原市)、大貫真紀、瀬端多平、後藤勝(以上西那須野町)
- 〔埼玉県〕 内田稔男、水野たかし(以上小川町)、昭和孵卵研究所(与野市)
- 〔千葉県〕 みかど育種大多喜研究農場(大多喜町)
- 〔東京都〕 大平農場(世田谷区)、山下広、アナグリウス・ケイコ(以上新宿区)
- 〔静岡県〕 山中松司、山中尊一郎、水谷一雄(以上細江町)、県柑橘類試験場(清水市)

冬学期に個人プロジェクトのための滞在延長をした研修生は13名であったが、希望を出した者は15名あった。つまり2名の滞在延長希望は職員会で受け容れなかったのである。理由は、

「わかる」ということの多層性について（Ⅳ）

コンサルタントとの話し合いの中で述べられた、滞在の動機と希望する実習内容の理由づけにおいて説得的なものが見出せないと、担当のコンサルタントが判断し、職員会で報告し、それが承認されたからである。この決定のプロセスには、本人のこれまでの ARI 内及び実習先での研修態度が大きく判断材料として他の職員によって考慮された側面もあるが、その研修生とコンサルタントとの人間関係やコミュニケーションのあり方も大きく作用していたと筆者は観察した。滞在を承認された研修生の中にも、研修態度で問題を感じるケースもあったからである。先にも少しふれたが、ARI の研修プログラムがすべての研修生にとって理想的に行われたわけではなく、うまく行かなかったと思われるケースも当然少数だがあった。それらについては、うまく行った事例と共に、次稿において述べる予定である。

冬学期の個人プロジェクトを行った13名の研修生とその実習先は、第12表に示した通りである。

〔後記〕 前稿及び本稿の注は、次稿と合せて通し番号を附し、次稿（最終稿）にまとめて記す予定である。
図表の番号も通し番号とした。